■論文■

認識論のレビューに関する一考察

―人材開発の手法の理解に役立てるために―

加　藤　雄　士

Ⅰ　はじめに

筆者は専門職大学院における人材開発論などの講義や企業研修などを通じて、教育やビジネスの現場における人材開発手法に関心をもってきた。例えば最近はマインドフルネスやレジリエンスにも関心をもっている。「マインドフルネス」は、「独特の方法で注意を払うこと。意図的に、その瞬間に、判断をせずに」[1] と定義されており、インテル、グーグルをはじめとする米国企業で取り入れられ、日本でも注目を集めている。レジリエンスは、「逆境、トラウマ、悲劇、脅威、重大なストレス（家族の問題、人間関係の問題、深刻な健康問題、職場のストレス、経済的なストレスなど）に直面しても、うまく適応していくプロセス」[2] と定義されており、2013 年の「世界経済フォーラム」（「ダボス会議」）のメイン・テーマとして取り上げられ、日本でも注目されている。こうした手法を理解するために、また、効果的な人材開発手法を理解し、選択するために、人が経験をどのように認識するのかそのメカニズムを理解しておく必要がある。そこで、認識論に関する理論を学際的にレビューする。なお、読みやすくするため、長文の引用については破線で囲み、筆者が重要と考える概念は強調文字にしている。

Ⅱ　認識論のレビュー

1．ナレッジ・マネジメントにおける認識論

（1）『知識創造企業』による認識論のレビュー

『知識創造企業』（1996）では、「西洋と日本の知的伝統に含まれる認識論への対照的なアプローチを簡単に見てみる」[3] とし、まず西洋認識論の歴史の再検討（レビュー）をしている。最初に対立的だが、相補的でもある西洋哲学の２つの大きな認識論の「主義」を紹介している。すなわち、知識は理性によって演繹的に導き出されると主張する「合理主義」と、知識は感覚的経験を通じて帰納的に得られるとする「経験主義」である[4]。

この二つの主要な認識論の伝統を、まずプラトンとアリストテレス、そしてデカルトとロックを対照しながらたどっている。例えばデカルトの合理論は、我々の外部に存在するものの真なる知識

1）　Jon Kabat-Zinn（1994）4 頁。大谷彰 (2014) は、マインドフルネスを「今ここに、の体験に気づき（awareness)、それをありのままに受け入れる状態および方法」と定義している。

2）　American Psychological Association HP: http://www.apa.org/helpcenter/road-resilience.aspx, 2015/09/01 アクセス

3）　野中、竹内（1996）27 頁

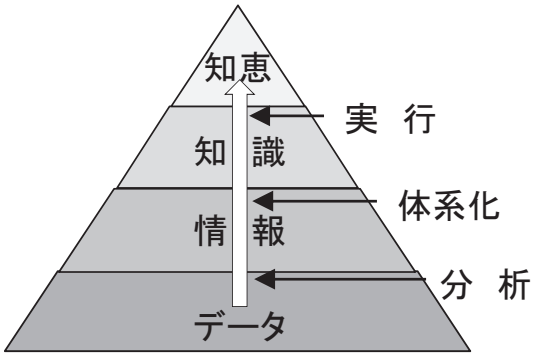
4）　野中、竹内（1996）28 頁。「合理主義」は、「知識は感覚的経験でなく、理性の働きによって得られると論じる。この見方によれば、感覚的経験によって正当化する必要のない先験的な知識が存在するという。そのような絶対的な知識は、何らかの自明の原理を基礎にした演繹的考察によって獲得される」とする一方で、「経験主義」は「これとは対照的に、先験的な知識の存在を否定し、感覚経験だけが知識の源泉であると主張した。この見方によれば、この世界すべては、本来的に客観的な存在なのである。人は時に幻覚を経験することがあるにしても、何かを感じたということ自体に意味があるというのである。実験科学がこの見方の典型的な例である」と説明している（同 28 頁）。

は、感覚ではなく精神によってのみ獲得できるというが、それは、英国経験論の創始者ジョン・ロックによって批判された。ロックによれば、この現実世界に存在するものは、本来的に客観的である。それらを間違って知覚することがあっても、何かが知覚されたことは疑いもなく明らかである[5]とする。続いて、カント、ヘーゲル、マルクスといった、二つの伝統を統合しようと試みた 18 から 19 世紀の哲学者を論じた後、次にデカルトの分割を乗り越えようとする 20 世紀哲学の試みをレビューしている。また、日本的伝統も概観しており、「西洋哲学には豊かな認識論の伝統があるけれども、日本には語るべきものはなきに等しい」[6]という。そして、日本の知的伝統は、「主客一体」「心身一如」「自他統一」という３つの特徴をもっていると説明し[7]、日本のその伝統と西洋哲学の伝統は相補的な関係にあると論じている[8]。

（２）梅本によるナレッジの概念

『知識創造企業』の翻訳者の梅本（2006）は、ナレッジ・マネジメントで対象とする「ナレッジ」について以下のように説明している。

> ナレッジ（知識）という言葉が使われているが、ナレッジ・マネジメントは実際には**データ、情報、知識、知恵**という「知」のすべてのレベルを対象としている。これらの四つの知は、微妙に意味が重なり合い、定義するのが難しいが、敢えて定義すれば、人間が作り出した信号あるいは記号（文字・数字）の羅列が**データ**で、それらを分析することによって抽出されてきた断片的な意味が**情報**、行為につながる価値ある情報体系が**知識**、実行されて有効だと分かった知識の中でも特に時間の試練に耐えて生き残った**知識**が知恵ということになろう。データを情報に、情報を知識に、さらに知識を知恵に変換するのが、ナレッジ・マネジメントなのである[9]。



図表１　ナレッジ･マネジメントにおける『知』のレベルの概念[10]

（３）考察

『知識創造企業』では、西洋認識論の歴史をレビューし、それが合理主義と経験主義という大きな２つの主義、あるいはそれら２つの主義を統合しようとした試みだと説明している。また、日本の身体と行為を重視する知的伝統についてもレビューしている。

また、『知識創造企業』の翻訳者でもある梅本は、ナレッジ・マネジメントでは、データ、情報、知識、知恵という４つの「知」を対象としているとして、これら４つの知のレベルの階層モデルを示している。「データ」が分析されて「情報」となり、「情報」が体系化されて「知識」となり、「知識」が実行された結果として「知恵」になると説明している。

本稿での関心は人材開発の手法にあり、「データ」が何であるのか、その「データ」がどのように「情報化」されるのかといった点についての具体的な説明を必要とするが、こうした点について、このモデルでは十分に説明していない。そこで、他の認識論に関する知見をレビューする。

5）野中、竹内（1996）33 頁
6）野中、竹内（1996）27 頁
7）野中、竹内（1996）38 頁
8）野中、竹内（1996）28 頁
9）梅本（2006）51 頁
10）梅本（2006）51 頁

2．グレゴリー・ベイトソンの認識論

（1）ベイトソンの認識論

グレゴリー・ベイトソン（1988）は、デカルト的二元論を超え一元論に行き着いたという[11]。そして、認識論を「いかにして知るということがなされるのか」[12]と定義し、アルフレッド・N・ホワイトヘッドとバートランド・ラッセルが「数学原理」で紹介した「論理的階型理論」[13]に基づいて、彼自身の認識論を提唱した。「論理的階型理論」では、「物」の集合全体を「集合（グループ）」とはいわず「クラス（級）」と呼び、それぞれの物は「要素（メンバー）」と呼ぶ。そして、「要素の集合全体は、その集合の要素になり得ない」と主張する。例えば、人類とは個人の集合である、しかし、その集合自体（人類）は個人ではない。

ここで「論理的タイピングエラー」が犯されると、地図と領域の間の混同が生み出され、場合によっては統合失調症患者が食物のかわりに、その食物が記述されているメニュー自身を食べ始めてしまうことになる。

認識論により、私たちの日常生活で直面する問題の内容を決定するプロセス（またはパターン）を知ることができ（プロセスは内容より「一つ高い論理タイプ」にある）、問題の克服が可能になる。コンテントレベルで、たとえどのような変化を試みても、私たちは、「終わりなきゲーム」[14]を続けて、どこにも到達しない可能性がある一方で、私たちが真に達成することを望むことをもたらすのは通常はプロセスレベルの変化である。すなわち、私たちが達成することを望む変化を生み出すのは、「第１次変化」ではなくて「第２次変化」である[15]。認識論的研究により、さらに、論理タイプの階層を登ることにより、「学習の学び方」を知ることができるようになり、そのことによりいかなる分野の学習プロセスも加速化することもできるようになる[16]。

（2）ベイトソンの認識論の基本前提

ベイトソン（2001）は「思考の前提」（“すべての精神”が必然的に拠って立つ基本前提）を16個あるとしている。そのうち本論文と直接関係があると思われるものを３つ紹介する。

①地図は土地そのものではなく、ものの名前は名づけられたものではない

アルフレッド・コーズィプスキーによって有名になったこの原則は、さまざまなレベルでの解釈が可能である。「豚やココナツのことを考えている人間の頭の中に、豚やココナツはない」というのが一番常識的な解釈だろうが、より抽象的なレベルでは、「すべての思考、知覚、情報伝達において、報告されるもの（物それ自体）と報告との間に一種の変換、すなわち記号化が起こる」という内容も持っている。“報告”と（あの神秘的な）“報告されるもの”とは、分類―物を類（クラス）に振り分ける―という性格を持った関係で結ばれる傾向にある。名付けるとは、すなわちクラスに入れ

11）グレゴリー・ベイトソン、メアリー・キャサリン・ベイトソン（1988）29頁。その一元論とは、「精神と自然がひとつの必然的統一体をなすもので、そのなかでは身体と離れた精神はなく、創造と離れた神はないとの確信である」と書いている(同頁)。

12）グレゴリー・ベイトソン、メアリー・キャサリン・ベイトソン（1988）43頁。ベイトソンによると、認識論の一般的な定義は「認識論とはいかにして知識が可能になるかについての哲学的研究」(同頁)。それに対して、ベイトソンの定義は「個々の生物または生物の集合体がいかにしてものごとを知るのか、考えるのか、決めるのかを考察するのが、その科学的な面。知る過程、考える過程、決める過程に必然的な限界その他の特徴を考察するのが、その哲学的な面」(グレゴリー・ベイトソン（2001）309頁)。

13）「論理的階型理論」に関する説明は、ワツラウィック他（1992）22頁を参考とした。

14）「終わりなきゲーム」とは、より高い次元の論理階型に属する変化が必要なときに、第一次変化が何度も試みられることによるか、反対に第一次変化が適当な時に第二次変化が適用されるときに起きる（ワツラウィック他（1992）60頁）。

15）第一次変化とは、システムの内側で生じ、システム自体は不変の変化のことをいい、第二次変化とは、システム自体の変化（全く異なった状態への変化）のことをいう（ワツラウィック他（1992）27頁）。

16）上記２段落は、すべて日本ＮＬＰ学院(2008)『日本ＮＬＰ学院認定ニューコードＮＬＰプラクティショナーコーステキスト』日本ＮＬＰ学院　付録10（北岡泰典著）。一部筆者が修正した。

ることだ。地図づくりも、本質的には一種の命名にほかならない。

②客観的経験は存在しない

すべての経験は主観的である。「われわれが“知覚”したと思うものは脳が作り上げたイメージである」という命題の一つの単純な系にすぎない。

すべての知覚―意識されるすべての知覚―がイメージの特性を備えていることは重要な意味を持つ。痛みは、必ずどこかに局地化されている。つまり、始まりと終わりと痛い場所を持ち、背景から浮き上がっている。誰かに足を踏まれたとき、私が経験するのは、“彼による私の足の踏みつけ”そのものではなく、踏まれてからややあって脳に届いた神経報告をもとに再構成された“彼による足の踏みつけについての私のイメージ”に他ならない。外界の経験には常にある特定の感覚器と神経経路が介在しているのである。そのかぎりにおいて、ものとは私の創造物であり、ものの経験は主観的であって客観的でない。

③イメージは無意識に形成される

この一般則は、情報源に感覚器を向ける（時として意識的な）行為と、“私”なるものが見、聞き、感じ、味わい、嗅ぎとっていると見なされるイメージから情報を引き出すという（常に意識的な）行為との間で起こることすべてに関して成り立つと思われる。痛みすら、正真正銘の創り出されたイメージである。

われわれは知覚の過程に入り込んでいくことはできない。意識されるのは知覚の産物だけである。知覚の産物だけを意識していれば十分なのだ。(a) 私が意識して見ているイメージは無意識の中で形成されたものであること、(b) この無意識的過程の中で、私が使っている多種多様の前提が、形成されたイメージの中に組み込まれていること―経験的認識論の第一歩には、この二つの一般的事実を捉えるべきであろう[17]。

（3）考察

ベイトソンは、「われわれが知覚したと思うものは脳が作り上げたイメージである」と言う。ベイトソンによれば、「**情報源に感覚器を向ける行為**」と「**感覚器で感知したと見なされるイメージから情報を引き出す行為**」とは別もので、後者のイメージが形成される過程は無意識に行われると説明する。ただし、無意識的に行われているその過程が具体的にどのようなプロセスなのかなどについては、ベイトソンは言及していない。そこでクリスティーナ・ホールの「思考モデル」をみていく。

3．クリスティーナ・ホール博士の「思考モデル」における認識論

（1）クリスティーナ・ホール博士による認識論

グレゴリー・ベイトソンに影響を受けたジョン・グリンダーとリチャード・バンドラーが創造したNLP（神経言語プログラミング）の開発に関わったクリスティーナ・ホール (2007) は、人間は本人と本人をとりまく世界を五感（視覚 / 聴覚 / 触運動覚 / 嗅覚 / 味覚）という一時的な「モダリティー」を通して体験しているとし、以下のように説明する。

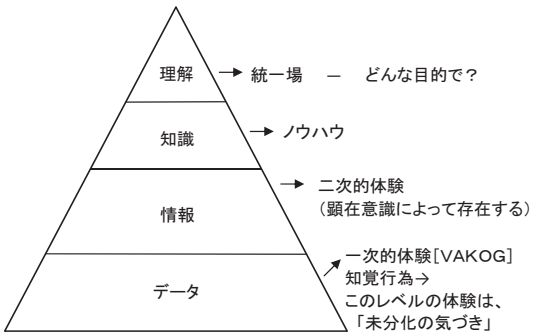
私たちは、「表象システム (Representational Systems)」と呼ばれる感覚モダリティーを通して、知覚されたインプットをコード化し、組織化し、保存し、意味づけているのである。知覚されたインプットは、内的に処理され（再体験・表象され re-presented）ると、対応する「感覚表象 (sensory representation)」に翻訳される。この感覚に表象が集まって「総体 (a synthesis)」を構成している。総体は、もともとの知覚インプットに類似はしているが、まったく同一ではない。「現実」と私たちの「現実の知覚」は同一ではないことを思い出すことが重要である。別の表現をすると、「地図（マップ）は現地（テリトリー）ではない」のである。

17）グレゴリー・ベイトソン (2001) 35-52 頁

各表象システム内の知覚的な組織化は、「従属要素（サブモダリティー）」と呼ばれるさらに小さな個別の単位（組織化のサブ・ユニット）によって構成されている。実際には、経験は従属要素のレベルで表象され、コード化され、保管される[18]。

（2）生きているシステムの思考モデルと４つの階層

クリスティーナ・ホール (2007) は、「脳は、感覚システムで認知した『体験』という世界をモデル化して、それを精神的な地図へとつくり変え」、「体験という世界にかかわる際は、このような『精神的な地図』（複数）が私たちの思考とふるまいを形づくる」[19] と説明する。このモデル（「生きているシステムの思考モデル」）は、データ、情報、知識、理解の４階層から成ると説明している。



図表２　生きているシステムの思考モデル 1[20]

①データ

データとは、一時的体験 (VAKOG) のことをいう。顕在意識からは独立して存在するものである。知覚行為であり、感覚のインプット（サブモダリティ）のみとなる。意味を持たず、削除・批判・評価もない。

②情報

情報とは、二次的体験のことをいう。顕在意識によって存在する。知覚されたことに「意味」を与える。一時的体験の「解釈」「ラベリング」をすることで、思考、反応、振る舞いの方向性を定める。

③知識

知識とは、「ノウハウ（実際的知識）」のことをいう。情報（「～について知っていること」）を組織化し、アウトカムを達成するための行動へと翻訳していく。

④理解

理解とは、「統一場（場を統合）」（どんな目的で行動するのか）ととらえられる。アウトカム達成に向けて行動する「理由」である。行動にはより大きな文脈の中で、より深いレベルの目的とつながることが必須となる[21]。

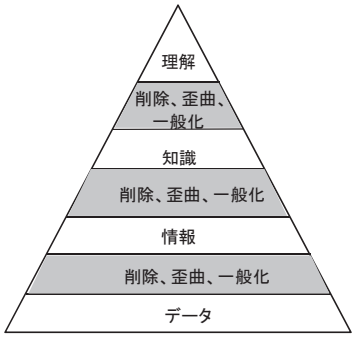
（3）フィルター機能

このようにデータ、情報、知識、理解へと上がっていくそれぞれの段階で、フィルター機能（削除、歪曲、一般化）が働く。例えば次のように説明される。

私たちは、たえず、すべての感覚システムを通して膨大な量の感覚的情報にさらされている。しかしながら、感覚的インプットは中枢神経系のフィルターにかけられるので、私たちが意識的に気付いているのは、いつもかぎられた量の感覚的情報だけである。このフィルター機構は、普遍的モデリング・プロセス (Universal Modeling Process) と呼ばれる「削除 (Deletion)」「歪曲 (Distortion)」「一般化 (Generalization)」の一連の体系的な働きを通して、知覚インプットを選別する。このような神経的フィルターがなかったら、私たちはたえず押し寄せる感覚的インプットの洪水に圧倒されてしまうだろう[22]。

18）クリスティーナ・ホール (2007) 33 頁
19）クリスティーナ・ホール (2007) 112 頁
20）図表 2、図表 3 ともクリスティーナ・ホール (2007) 上記 169 頁を参考に筆者が作成した。VAKOG とは五感のことをいう。
21）クリスティーナ・ホール (2007) 112 頁、クリスティーナ・ホール (2008)169 頁。筆者が一部加筆修正した。
22）クリスティーナ・ホール (2007)　33 頁

以下の図を見て分かるように、削除、歪曲、一般化は、このシステムの中で３回登場する。



図表３　生きているシステムの思考モデル２

（４）考察

クリスティーナ・ホールのモデルは梅本（2006）のモデルと似ている。例えば、「データ」について、梅本は「人間が作り出した信号あるいは記号（文字・数字）の羅列」だと言い、クリスティーナ・ホールは「感覚のインプット」だと説明する。また、「情報」については、梅本は「データを分析することによって抽出されてきた断片的な意味」だといい、クリスティーナ・ホールは「知覚した対象を、精神的な複合概念であるカテゴリー／クラスに分けて組織化する」[23] と説明する。「知識」については、梅本は「行為につながる価値ある情報体系」といい、クリスティーナ・ホールは、「行動へと翻訳された『ノウハウ』のこと」という。最上位階層の概念については、梅本とクリスティーナ・ホールとでは概念自体が違っており、梅本は「知恵」といい、クリスティーナ・ホールは、「理解」という。そして、梅本は「知恵」を「実行されて有効だと分かった知識の中でも特に時間の試練に耐えて生き残った知識」と説明し、クリスティーナ・ホールは、「理解」を「場を統合するもの」、アウトカム達成に向けて行動する「理由」と説明している。

このモデルでは、感覚器官で感受した情報のうち意識的に気づいたものから段階的にデータ、情報、知識、理解へと変換するプロセスで、削除、歪曲、一般化というフィルターを通過すると説明している。このフィルター機能が人の認識に大きな影響を与えており、効果的な人材開発手法を探求するうえで鍵となる。続いて、「感情」という概念を加えて認識論を説明する海保、南郷らの認識論を紹介する。

４．看護学（海保静子、南郷継正、薄井坦子）における認識論

（１）海保、南郷による認識論

海保静子 (1999) は、認識とは、脳が自分の脳細胞のなかに結ぶ「像」のこと（反映）をいうとして、次のように説明する。

> 人間という人間はすべて、認識をもっている存在だが、この**認識**なるものはその人間の環境である対象が五感器官をとおして反映されて、脳細胞のはたらきとして自らの脳細胞のなかに像を結ぶことによって成立し、しかもそれと直接に頭脳活動としても認識の活動がはじまる。つまり頭脳活動というものは、対象が五感器官、すなわち視覚、味覚、嗅覚、触覚、聴覚といった器官をとおして反映される（伝えられる）ことによって**脳細胞が対象を像として映じる**（認識として形成される）ことにより、直接に認識としての活動がはじまる[24]。

（２）五感情像

海保は、認識は脳細胞の中に像を結ぶ（映じる）ことによって成立すると説明しており、その「像」は「五感情像」だとする。海保の師である南郷継正 (2006)[25] は、この五感情像について次のように説明する。

> ならば、その像、とはそもそもなにか、といえば**五感情像**である、ということになる。

23）クリスティーナ・ホール (2007)　112 頁
24）海保静子 (1999)40 頁
25）南郷は逆に海保のことを弁証法の師と言っている。

すなわち視覚だけではない。聴覚がそこに加わっているだけでもない。味覚、嗅覚、皮膚感覚、といった**五感のすべてが動員されて『像』が形成**されている。そして杉の木を見たときに、その像が頭の中に結ばれることを**反映**といい、この像のことを認識という。

像というのは、ある実体があって、それを映しとったものである。杉の木の例でいえば目の前の杉の木を模写した像であり、対象を映したとったものである。

ならばカメラで撮影した写真とはどう違うのか、それとも同じなのかということが次に問題になる。まず答えをだせば、もしも認識が**感覚像**だとしたら違わないといっても間違いではないが、**感情像**なら違うということになる[26]。

では、その「感覚像」ではない「感情像」とは何かがポイントとなる。

杉の木をみたときも、ただ単に杉の木をみるんじゃなく**自分の感情で杉の木をみる**。杉の木のそのままではなく、自分のアタマの中にできあがっている杉の木の像でもって、その人の感情で対象に問いかけている。だから大志を抱いて杉の木に問いかけるのと、『あんな杉の木』と思って対象に問いかけるのとでは反映される像が違ってくる。人間はその人の感情で杉の木の像が描かれる。それが感情像ということである[27]。

空手の指導者でもある南郷は、感情像について「相互浸透」という概念を用いて次のように説明する。

その人の『空手の突』もその人の『**感情像**』として、『空手の突』ができあがっている。だから、イヤイヤながら『空手の突』をやるのと、大志を抱いて『空手の突』をやるのとでは、『空手の突』のできあがりかたが違ってくる。これが自分と『空手の突』との**相互浸透**であり、コミュニケーションだ。

大志をもって杉の木に問いかけると、スラリとそびえたっており、大きく枝を張っていると反映する[28]。

さらに、南郷（2006）は、認識には大きく分けて 2 つあるという。

認識は像のことをいいますが、これには大きく分けてふたつあります。**映し出されたモノ（認識）**と**創りだしたモノ（認識）**です。**映し出されたモノ**とは、自分の対象とした外界が自分の感覚器官をとおして反映したばあいの像をいいます。**創りだしたモノ**とは外界を映し出した像、映し出された像を原基形態（おおもとのかたち）（あとで説きます）として、それを基に自分が頭のなかに描いたモノ（自分独自の像）です。

認識の原基形態は、対象である外界が感覚器官をとおして脳に反映した像であるとなるのです。ここで原基形態という大変難しい言葉が使われていますが、このシンプルな意味は、『認識が最初に誕生する時の像の形態（かたち）』のことです[29]。

認識には、映し出されたモノ（認識）と創り出したモノ（認識）の 2 つがあるが、前者の映し出されたモノ（認識）でさえも、百人いれば百人とも違う像になるという点が重要である。なぜ百人百通りになるかという点について、南郷 (2006) は次のように説明する。

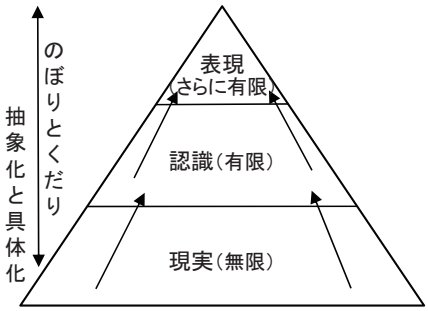
すべての人たちの頭のなかの像はけっして同じではありません。絶対に同じにはなりません。これはまったく同じモノを、同時に同じように反映させても（みてとらせても）絶

26）南郷継正 (2006) 63 頁、65 頁
27）南郷継正 (2006)66-67 頁
28）南郷継正 (2006)67 頁
29）南郷継正 (2006) 150、153 頁

対に同じ反映、同じ像とはならないのです。

すべて認識は、その人の、その人だけの感覚器官をとおしてのみ対象を反映させます。これ以外の反映はありえません。そしてその人の感覚器官はすべてその人だけのモノです。他人の感覚器官を借りることは不可能です。そしてそればかりでなく、感覚器官は五種類あります。つまり五感覚器官なのです。この五つある感覚器官は、別々に使っても、一体として使っても絶対に平等に使うことはできません。どんなに全神経を用いて熱中しても、**感覚器官のそれぞれに異なった反映がある**のです。たとえば、両眼を平等に使おうとしても必ず別々の反映をしますし、両耳を同じように使おうと思っても別々の力としてはたらきますし、といった具合ですので、A さんと B さんが、五つの感覚器官を同じように使う（反映させる）ことはとうてい無理なのです。これがすべての感覚器官の現実です。もう一度いいますが、一人の人間の感覚器官にかぎってもそうなのですから、まして、他人であるあなたと私とでは当然に同じ感覚、同じ反映はありえないのです。同じ感覚器官の同じ感覚、同じ反映、といったことがない以上、同じ像は誕生しようがない！のが人間なのだ、とわかることが大切です[30]。

なお、認識と表現（言語等）との関係については、看護学の薄井坦子 (1996) の図が参考になる。



図表 4　現象―認識―表現の構造[31]

クリスティーナ・ホールの図と考え方は似ている。

その表現の一つである言語について、南郷(2006)は、次のように説明している。

個性像を共通像にするために言語は必要である[32]。

百人百通りの個性像を共通像にするために言語が必要だというのである。

（3）考察

南郷は、認識のことを、五感を通して反映されて脳細胞の中に像を結ぶと説明する。そして、その像は、五感が全て動員されて形成されているとともに、感情がそこに伴っている「感情像」だと説明している。例えば、杉の木をどのような感情でみるか、ということによって違う像になって認識が形成されるという。また認識には大きく分けて２つあると言う。そのうち、映し出されたモノ（認識）でさえ人によって同じ像を反映させることはない「個性的感情像」だという。こうした認識についての詳細な説明は、これまで紹介してきた梅本、ベイトソン、クリスティーナ・ホールの説明にないもので、ベイトソンが無意識的なプロセスと説明していたプロセスの解明に大きな貢献をもたらしている。続いて、地橋秀雄のモデルをみていく。

５．ヴィパッサナー瞑想における認識論

（1）レジリエンスとマインドフルネス

「はじめに」で紹介した「レジリエンス」についての日本での第一人者である久世浩司は『レジリエンスの鍛え方』の中で、ヴィクトール・フランクルの「刺激と反応の間にはスペースがあり、そのスペースをどう生かすかが私たちの成長と幸福の鍵を握っている」[33] という話を紹介して、そのスペースについて人の持つ傾向を説明している[34]。その刺激と反応をさらに細かく分析して説明して

30）南郷継正 (2006) 156-158 頁
31）薄井坦子 (1996)26 頁の図を一部筆者が修正した。
32）南郷継正 (2006) 158 頁

いるのがヴィパッサナー瞑想の地橋秀雄のモデルである。なお、「マインドフルネス」は、初期仏教の瞑想法であるヴィパッサナー瞑想を源流としている。

（2）地橋秀雄のモデル

地橋（2006）は、「認知とは、対象が知覚され、心に認識されることをいい、『対象（情報）』と『六門（感覚受容器）』と『識』の3要素が矢印でつながる瞬間に、意識が生まれ、認知の最初のステージが始まる」[35] という。そして、人の認知について以下のように段階的に説明している。

「**対象**」とは、知覚される外界の事物や脳内イメージや思念のことをいい、色（しき）、声（しょう）、香（こう）、味（み）、触（そく）、法（ほう）の6つで表現される。

「**六門**」とは、感覚受容器のことで、眼門（げんもん）、耳門（にもん）、鼻門（びもん）、舌門（ぜつもん）、身門（しんもん）、意門（いもん）の6つを言う。「対象」と「六門」を合わせて「十二処」と言う。

「**触**（パッサー）」とは、乱入してくる情報を6つの「識」のどれかに接触させる役目をもつ。「触」は個人差があり、当人の興味や関心、コンプレックスなど諸々の理由から何かを選び、何かを捨てる取捨選択を行っている。そして、選ばれた情報だけが、「識」にぶつかり、恐るべきスピードで意識が生滅している。

「**識**」とは、眼識（げんしき）（見た）、耳識（にしき）（聞いた）、鼻識（びしき）（匂った）、舌識（ぜっしき）（味がする）、身識（しんしき）（感じる）、意識（いしき）（考えた、妄想した、イメージした）の6つを言う。

「**受**」とは、感じる働き（感受作用）のことをいう。「識」が生じると同時にこの感じる働きがセットでともなう。「受」には苦受、楽受、不苦不楽受の3種類がある。苦受は、嫌悪→怒り→激怒と自然に展開してしまう怒り系の煩悩である。楽受は、欲→貪り→執着へと自然とエスカレートする欲望系の煩悩である。

以下に説明する「尋」が無自覚に機能した結果、怒り系の煩悩か、欲望系の煩悩のドミノが倒れていく。つまり、人は快感を求め、不快を避けようとする「快楽原則」で生きるようにプログラミングされている。

「**想**」とは、知覚のことであり、ここで対象の内容が知られる。例えば「匂った」（「鼻識」）→「受」→「〔コーヒーだ〕と思った」（「想」）の流れとなる。ここ（「想」）でしばしば間違いを犯し、個人差が著しい。例えば古いロープを眼にした瞬間、「蛇だ！」と錯覚して、恐怖に震える人もいれば、ロープとして認識できる人もいる。このように「想」の段階は、事実の世界と妄想の世界とが分かれていく分岐点となる。情報の加工や歪曲などが行われ、心の汚染が「想」の働きを妨害し、誤たせる。

「想」が機能し、情報の中身が特定された瞬間、もっと詳しく情報を知ろうとして、心はどこか一点にフォーカスされていく。さらに詳細な情報を得ようと、注意が向けられるその働きを、「**尋**」（ヴィタッカ）と言う。「尋」が何に向けられていくかによって、次の瞬間に起動する「反応の心」の方向が定まる。例えば、「何の匂いだろう」→「魚を焼いているのか」→「サンマだろうか、サバだろうか」と、自分の意思で「尋」を振り分けながら分け入っていく。「尋」を働かせるのは、興味や関心、コンプレックス、その時々の欲望や怒り、執着など自分の心の背景となっているすべてである。

絶えず、正しい浄らかな方向を目指していく意志を持つことが「尋」を善なるものに向かわせ「反応系の心」を浄らかなものにしていく。

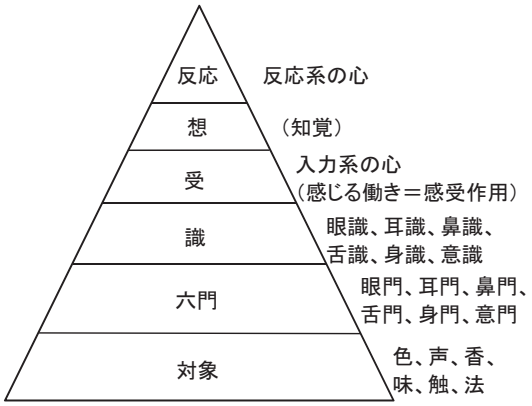
「**反応**」とは、反応系（出力系）の心のことをいい、3層構造となっている。すなわち、以下の3つである。

①後天的な学習全般で作成されたプログラム

33）久世浩司 (2014) 80 頁。　フランクルのこの一節を読んだスティーブ・コービー博士が『7 つの習慣』80-85 頁の中で書いている。
34）久世浩司 (2014) 80-104 頁
35）地橋秀雄 (2006) 76 頁

（人生観・世界観・価値観・ものの見方）
②刷り込みのプログラム
③ DNA 情報による生命の根源的なプログラム [36]

上記のプロセスを、筆者（加藤）の解釈を入れて図解すると以下のようになる。



図表 5　地橋による人の認識モデル 1[37]

（3）ヴィパッサナー瞑想とサティ

①直接知覚されたものにはゆがみがない

ヴィパッサナー瞑想は、思考を止めて、事実をありのままに観ることができれば、一切の「ドゥッカ（苦）」から解放される、という理論に基づいている。苦の原因は、妄想にあり、その妄想は一瞬一瞬の事実に気付く「サティ」の技術によって止められる。思考が始まった瞬間、「妄想」「イメージ」とラベリング（言葉確認）されると、連鎖しようとする思考の流れが断たれてしまう。こうして思考が止まれば、心に入った情報が編集されたり歪められたりすることなく、ありのままに認知される。ありのままに観られた事象は夢でも妄想でもない「真実の状態」なので「ダンマ」と呼ばれる。

私たちの見るもの、聞くもの、感じるもの、知覚するものは常に誤解と錯誤だらけである。先入観や思い込み、早とちり、思考の編集、エゴの検閲など、諸処の心のフィルターがかかって情報が歪む。しかるに、ダイレクトに、直接知覚されたものは情報に歪みがない。「法」とは、情報にゆがみがないことである [38]。

②ラベリングの認識確定

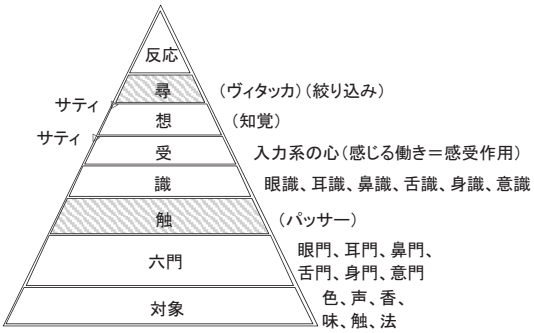
みたものを「見た」、聞いたものを「聞いた」、感じたものを「感じた」と一つ一つ内語（ないご）で言葉確認（ラベリング）しながら、純粋に事実だけに気づいていく、この作業を「サティ」と言う。

例えばガラス窓越しに一面の銀世界を見た瞬間、Ａさんは瞬時に「見た」とラベリングし（「眼識」＋「受」が発生した時点で）、Ｂさんは「雪だと思った」とラベリングした（「想」が生起した後に）。Ｃさんは、ラベリングしなかったので、「雪」を見た刹那、涙ぐんだ（雪の認知→連想→情緒的な反応→落涙）。Ｃさんのケースは自分が心の主ではなく、勝手に展開する心に振り回され、喜怒哀楽の煩悩に巻き込まれてしまった。心の奴隷状態になるのではなく、こちらが自在にコントロールしていけることを目指すのがヴィパッサナー瞑想である [39]。

（4）考察

地橋の説明は人の認識のプロセスを段階的に説明していて参考になる。人材開発の手法の研究に関しては、乱入してくる情報から「触」が取捨選択しているという点、「受」に３種類あるという点、「想」の段階で事実の世界と妄想の世界が分かれていき個人差が激しいという点、「尋」を振り分けながら「反応」に分け入っていくという点は特

36）地橋秀雄 (2006)76-92 頁
37）図表 5、図表 6 とも地橋秀雄 (2006) の説明をもとに筆者が作成した。
38）地橋秀雄 (2006)72-77 頁
39）地橋秀雄 (2006)94-97 頁。



図表 6　地橋による人の認識モデル 2

に参考になる。

Ⅲ　おわりに

本稿では、教育やビジネスの現場での人材開発の手法に関する研究の一環として、認識論に焦点を当て、人の認識がどのように説明されてきたかを学際的にレビューしてきた。

『知識創造企業』の野中、梅本らによる説明を西洋哲学の認識論には深入りせずに見た後で、グレゴリー・ベイトソンの認識論、クリスティーナ・ホールの認識論、海保、南郷らによる看護学における認識論、ヴィパッサナー瞑想（地橋秀雄）における説明などを取り上げてレビューしてきた。

効果的な人材開発方法を考察する上で、クリスティーナ・ホールのモデルは、データ、情報、知識、理解へと段階を上がっていく段階で、削除、歪曲、一般化のフィルター機能が働くという点が特に参考になる。

また、海保、南郷らによる看護学における認識論の説明は、人の認識に関する疑問点を網羅して体系的に説明してくれており参考となる。さらに、人材開発手法としても最近注目を集めているマインドフルネス、レジリエンスなどの手法を理解するうえでは、地橋の詳細な説明は大変参考になる。今回のレビューを基にして、効果的な人材開発手法の研究を展開していきたいと考えている。

参考文献

Christina　Hall（2007）『The Art Of Training』VOICE WORKSHOP INC.(邦訳 : クリスティーナ・ホール (2007)『芸術としてのトレーニング　』VOICE)

Jon Kabat-Zinn（1994）『Wherever You Go, There You Are: Mindfulness Meditation in Everyday Life』Hyperion. (邦訳 : 田中麻里監訳、松丸さとみ訳（2012）『マインドフルネスを始めたいあなたへ』星和書店)

薄井坦子（1996）『改訂版　看護学原論講義』現代社

梅本勝博 (2006)「学者が斬る ナレッジ・マネジメントの起源と本質」『エコノミスト』第 84 巻第 41 号毎日新聞社

大谷彰（2014）『マインドフルネス入門講義』金剛出版

海保静子（1999）『育児の認識学』現代社

久世浩司（2014）『レジリエンスの鍛え方』実業之日本社

クリスティーナ・ホール著、大空夢湧子訳（2008）『言葉を変えると、人生が変わる　NLP の言葉の使い方』VOICE

グレゴリー・ベイトソン、メアリー・キャサリン・ベイトソン著、星川淳、吉福伸逸訳（1988）『天使のおそれ　聖なるもののエピステモロジー』青土社

グレゴリー・ベイトソン著、佐藤良明訳（2001）『精神と自然　生きた世界の認識論　改訂版』新思索社

ジョン・カバットジン著、春木豊訳（2007）『マインドフルネスストレス低減法』北大路書房

スティーヴン・R. コヴィー著、ジェームス・スキナー訳（1996）『7 つの習慣』キングベアー出版

地橋秀雄（2006）『ブッダの瞑想法　ヴィパッサナー瞑想の理論と実践』春秋社

南郷継正（2006）『なんごうつぐまさが説く看護学科・心理学科学生への“夢”講義　第一巻』現代社

日本ＮＬＰ学院 (2008)『日本ＮＬＰ学院認定ニューコードＮＬＰプラクティショナーコーステキスト』

野中郁次郎、竹内弘高著、梅本勝博訳（1996）『知識創造企業』東洋経済新報社

ポール・ワツラウィック、ジョン・H・ウィークランド、リチャード・フィッシュ著、長谷川啓三訳（1992）『変化の原理　問題の形成と解決』法政大学出版局

ポール・ワツラヴィック、ジャネット・ベヴン・バヴェラス、ドン・D・ジャクソン著、山本和郎、尾川丈一訳（1998）『人間コミュニケーションの語用論　相互作用パターン、病理とパラドックスの研究』二瓶社